Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

Oktober 2013

30

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第30号

発行日　２０１３年１０月２５日
発　行　鳴門市ドイツ館
編　集　川　上　三　郎
〒779−0225
鳴門市大麻町桧字東山田５５−２
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL : http://www. city. naruto. lg. jp/germanhouse/
e-mail : doitukan@city. naruto. lg. jp

新ドイツ館の20周年を迎えて

そもそも鳴門市ドイツ館ができたのは、1972（昭和47）年５月のことです。これは、板東俘虜収容所跡地に残されたドイツ兵捕虜の慰霊碑への高橋春枝さんの長年にわたる清掃奉仕とその後の地元民と元捕虜との交流をきっかけに生まれた記念館でした。その後、資料が増えて手狭になったことと建物の老朽化もあり、1993（平成５）年10月に新しいドイツ館が建設されました。今年はこの新しいドイツ館が建設されて、ちょうど20年になります。特別の祝典行事はありませんが、記念企画として講演会と特別展示をしています。

講演会

６月30日（日）に「第一次世界大戦と日本の捕虜収容所 ―板東、丸亀、名古屋の例 ―」と題して３人の先生方を招いて行われました。

1. ドイツ人俘虜の訳した『古狸合戦』
   依岡　隆児
2. ユダヤ人捕虜　ベルリーナー
   小阪　清行
3. 名古屋俘虜収容所と一人の将軍の話
   ～退役陸軍中将　仙波太郎～
   校條（めんじょう）善夫

依岡隆児氏の講演は、明治時代の講釈師、神田伯龍の講談『実説古狸合戦』のクルト・マイスナーによる翻訳をテーマとしています。「グローカル」（globalとlocalの合成語）をキーワードに四国出身の著名人による日独交流史に言及した後、マイスナーとこの独訳の成立の背景と経緯に話がすすんだのですが、いささか時間が足りなくて『古狸合戦』自体のことを余り話してもらえなかったことが心残りでした。

小阪清行氏の講演は大きく２部に分れ、最初に丸亀、その後板東にいたジークフリート・ベルリーナー（日独戦争と捕虜時代をはさむ前後の時期、東京帝大の講師でした）とその家族について、トリーア独日協会理事のハンス・ローデさんの講演をもとに話してくれました。興味深い話題がいくつもありましたが、内容については次のURLでお読みいただけます。

http://koki.o.oo7.jp/Berliner%20Rode.htm

ついで「ドイツでのユダヤ人問題」を多岐にわたる角度から多くの資料とともに講演されました。

校條善夫氏の講演は、氏が長らく取組んでこられた名古屋俘虜収容所についての話でした。名古屋での捕虜の処遇の改善に努力したドイツ留学経験のある退役軍人、仙波太郎中将にスポットライトを当てるものでしたが、名古屋にも捕虜への心配りをする軍人がいたことを深く印象づける講演でした。

この講演会では板東俘虜収容所にいた２人が取上げられていますが、板東俘虜収容所自体に関する話がほとんどありませんでした。そこで来年の２月か３月に板東俘虜収容所についての講演会の企画を検討しているところです。

ドイツ館20周年記念展「ドイツ館 20年の歩み」

上記標題の特別展が10月５日（土）から11月１日（予定）で開かれました。これは国際交流員ロバート・テルシッグが企画・制作したもので、ドイツ館に古くからある資料などを集めて展示しています。これまで見たことのなかったものもあり、興味深いものでした。

内容は、「ドイツ館建設」、「館長とその活動」、「国際交流員とその活動」、「ドイツ館の来館者」、「ドイツ館における行事とイベント事業」、「特別展と時代の出来事」という６つのテーマに分け、60点近くの写真や新聞記事などを使って展示し、解説もつけています。

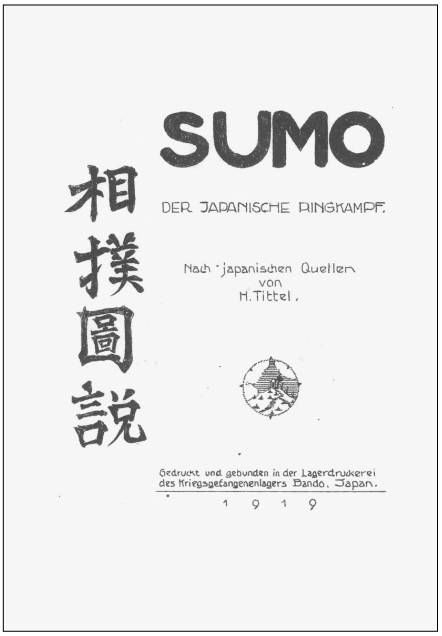
ドイツ館での展示の後、鳴門市役所内の市民ギャラリーで展示をすることになっています。

ドイツ館20周年記念展「ドイツ館 20年の歩み」の様子

所蔵史料の紹介

『相撲図説』

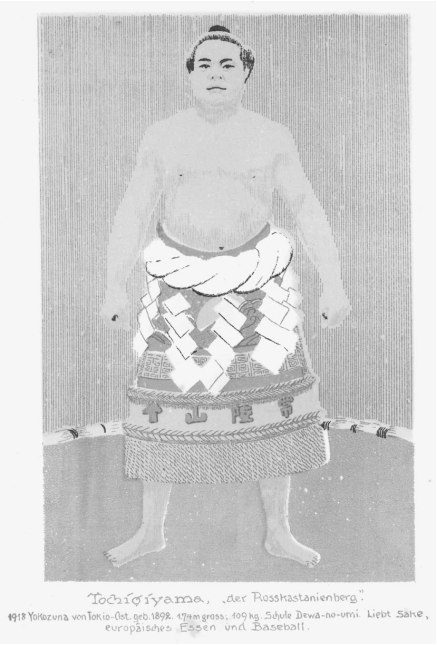
このドイツ語のタイトルを訳すと「相撲―日本の格闘技」となりますが、一番外のカバーには日本語のタイトルのみが書かれています。タイトルの下には「日本語の文献から」とあって、日本語の相撲に関する著書の単なる翻訳と勘違いしそうになるのですが、実際は違います。ドイツ語では「文献」に当る語が複数形になっていて、さまざまな文献を読み合せた上でまとめ上げた著作です。「すもう」という語の語源から始まって、相撲のそもそもの起源と歴史がまず述べられていて、著者ティッテルの並々ならぬ日本語の実力を知ることになります。その後およそ相撲に関するさまざまな事項の説明や話題が並んでいます。



例えば、横綱、大関、関脇、小結、前頭といった階級名はもちろんのこと、化粧まわし、給金の話、女性に人気があるとか、しこ名のつけ方、好きな料理や余暇の過し方、横綱の大錦（卯一郎）に至っては「日本少年」という雑誌にのった半生記の翻訳といった具合にいささかごたまぜの話題も取上げていて、著者が相当な相撲好きで、新聞や雑誌などをいろいろ読みあさっていたことを窺わせます。もちろん、決り手に関する絵入りの記述もあります。これはドイツ語による相撲の概説書として立派なものではないかと感じました。

発行時期は『ディ・バラッケ』６月号（1919年）に「近日刊行」との広告があるので、おそらく1919年７月でしょう。

この本には発行当時の３人の横綱（大錦（卯一郎）、栃木山、鳳）のカラー図版があります。しかし、間違いがあるようです。最初気づいたのは栃木山とする絵で、その化粧まわしに常陸山とあるのです。まさか土俵入りに他人の化粧まわしをつけるなど考えられませんから、この絵は常陸山を描いたものと言えます。著者のティッテルは日本語の読解力が優れていたはずで、間違っているのは不思議です。気になって他の絵とインターネットで見られる当時の力士の写真と見比べてみると、大錦としているのはむしろ栃木山らしいことも判明しました。



後から気づいたのですが、東北大学教授の長友雅美氏がこの本についての紹介と共にテキストの翻刻ならびに注釈をなさっています。興味のある方はインターネット上に公開されていますので、下記の論文タイトルを検索してみてください。上述の横綱のカラー図版以外の挿絵も再録されています。

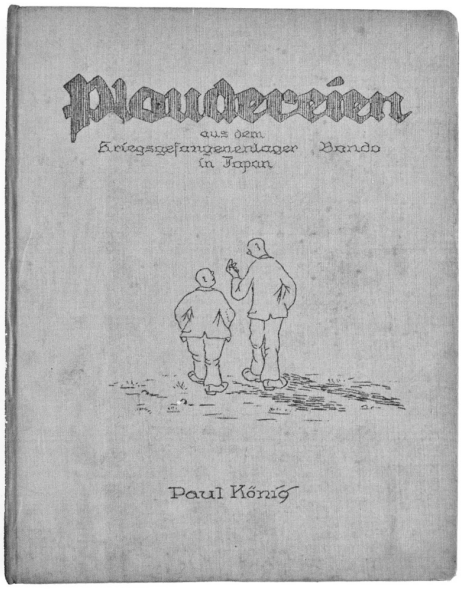
「あるドイツ人俘虜の日本文化探訪 ― Hans Tittel の『相撲圖説』その壱」東北大学大学院国際文化研究科論集第十九号、「同その弐」、同論集第二十号

ドイツ館には地方巡業に来た力士たちの写真があり、そのほかに相撲興行が行われている小屋掛けを外から撮した写真もあります。これについては未だに調査しきれていないのですが、少なくとも板東俘虜収容所にドイツ兵が来て以降のことのようです。元捕虜ヴィリー・ケーバーラインの遺品資料（国立歴史民俗博物館が所蔵）から、これら力士を撮している写真がケーバーラインによるものであることが分っています。これらの写真の中にはドイツ兵と力士が一緒に写っているものもあります。とりわけ目を引くのが横綱の写真です。最近知ったのです

が、これは第26代横綱大錦卯一郎です。彼は1917年５月場所から横綱となっていますので、ここからこれらの写真はケーバーラインが板東に移って以降撮影したものと判断できます。なぜなら彼を含む松山収容所の捕虜たちが板東に来たのは1917年４月９日のことだからです。新聞記事などをもとに、大錦を筆頭とする出羽海一門が徳島への地方巡業にいつ来たのかを調べたいと思っているのですが、その時期の地元新聞が残っていないこともあり、果せていません。

『収容所漫筆』

これはパウル・ケーニヒが板東収容所新聞『ディ・バラッケ』（以下「新聞」）に寄稿した原稿と、この新聞が発刊されるまでの間に書かれたものなどを加えて一冊の本にまとめたものです。挿絵がいくつもありますが、新聞にはなかったものもあります。画家はグスタフ・メラーです。以前第20号で、板東で印刷されたプログラムにしばしば見られるロゴマークの解説をして、この人のシグネチャーであることを書きました。



寸法はほぼＢ５版大で、単色刷、ページ数184。原題は"Plaudereien"で、これは特にこれといったテーマを決めることもなく、ただお喋りをすることを指す俗語的な表現です。これを「漫筆」と訳したのは板東収容所研究の先達である冨田弘氏で、このタイトルでこの翻訳の私家本を1988年に製作されていますが、公表されなかったようです。

この本の内容の大半は新聞に掲載されたものですが、そうでない文章も６つあります。また新聞に掲載されていても、少々異同はあるようで、例えば「観劇のルール」は新聞では８項目ですが、こちらは10項目です。1919年１月以降新聞に載せられた文章は収録されていません。

内容をちょっと紹介すると、一番最初に「板東に来て１週間」という随筆があります。これは新聞の発刊（1917年９月）以前に書かれたもので、次のようなことが書かれ、以前の収容所からの雰囲気の好転を喜んでいます。

最初に板東収容所の建物群を板塀越しに見たときがっかりした、丸亀の寺院の方がよっぽど良かった … しかし外見とはちがい、住んでみると中は広く、窓ガラスからの光りで明るく、通気がよく、ひょっとしてこれはドイツのやり方を手本に建てられたのではないか … 朝夕の点呼をのぞいて一日中日本兵の姿を見なくてもすみ、部屋の中を衛兵が見回って不愉快な目に遭うこともない

収容所長は以前徳島収容所の所長をしていて、ドイツ兵捕虜の自主性を尊重する方針で、われわれとうまくやって行けそうだ

すでにこの収容所を支配する全体の雰囲気からして、われわれはずっと気に入っており、どの面から見てもより自由で束縛がない感じがする …

この写真は松山から板東へ移る途中の捕虜たちを撮したもので、徳島市内から板東に向け、吉野川（当時は別宮川といいました）にかかる橋を渡っているところです。行列の先頭近くに奇妙なもの（何となく十字架にも見える）が突きだして見えています。この正体は「板東に来て１週間」中の次の文章から判明します。

われわれより１日後に松山の３つの収容所から大勢の日本軍の護衛のもと400人の戦友が到着した。一番哀れな彼らは手荷物をずっと自分で運んで来なければならなかった。その中のひとりは自製のコントラバスを背中に担いで、まるで巨大なカブトムシのようであった。

この図体の大きな弦楽器をなんと、徳島市の南に位置する小松島港から板東俘虜収容所までの28kmをずっと担いできたというから驚きます。運送費を自腹で出せば業者に任せられたのですが、その負担を避けたのと取扱いを知らない者の手で繊細な楽器が傷つくのを恐れたのでしょう。

水原秋桜子の句碑

ドイツ館西側の植込みの中に写真のような句碑があります。ドイツ館を訪れるほとんどの人が通る南側の広場から少し離れているため、あまり目に触れることがなく、ドイツ館に来たことがあっても、その存在に気づかない人が多いかもしれません。

その碑には
「石橋にあつまる橋のみな涼し」
という俳句と「秋桜子」という作者が刻まれているだけで、その由来、建立に至った経緯などについては何も書かれていません。何故この石碑がここにあるのか不思議に思っていたものです。

先日、鳴門市の小児科医、兼松宏氏より贈られた著書の中に、この石碑について書かれたエッセーがありました。ご自身もかかわったこの句碑の建立にいたるまでの経緯がはっきりしましたので、簡単に紹介しておきます。

これは、ドイツとの縁の非常に深く、また日独交流にも力をつくされた故石橋長英氏（日本国際医学会初代理事長）の寄贈によるものですが、氏はかつて旧ドイツ館を訪問されたことがあるのだそうです。おそらくそこで感銘を受け、思うところがあって寄贈を思いつかれたようです。

石碑は、四国では珍しい根府川石を使って東京の石材店で製作され、昭和61年１月に旧ドイツ館に設置されました。ただ、寄贈者の石橋氏が高齢かつ病気ということで除幕式ができなかったそうです。そのせいもあるのでしょう、当時の新聞に関係記事は見当りませんでした。そして新ドイツ館竣工後、現在地に移設されています。

なお、この句が選ばれた理由は不明です。ひょっとして、旧ドイツ館から少し足を延ばすと捕虜の作ったドイツ橋という石橋がありますから、それに因んだのかもしれませんが、あくまで推測です。

板東俘虜収容所の印刷物に関する卒業論文

東京都在住の中林悦子さんが、板東俘虜収容所にいた捕虜の制作した音楽や演劇のプログラムデザインをアート作品として注目し、これについて考察する卒業論文をドイツ館に送ってきてくれました。これは今春卒業した武蔵野美術大学通信教育課程に提出したものですが、論文のためにドイツ館の資料を閲覧・提供・解説した所以もありますので、ここに簡単に紹介しておきます。

プログラム表紙のデザインあるいは収容所新聞『ディ・バラッケ』の挿絵の人物画などについては、以前から当時の美術界の潮流との関係を指摘されてはいたのですが、それ以上深く追求したことはありませんでした。それをここでは、具体的に分離派やユーゲント・シュティールの作品と比較しながら論考をしていて、ただ単にプログラムの謄写版印刷技術のすばらしさにしか目のなかった筆者にとって、教えられるところが多々ありました。

これまでの主な行事

４月１日（月）～15日（月）　鳴門百景写真展
４月20日（土）～５月10日（土）　ドイツ観光展
５月３日（金）～５日（日）　ドイツワイン祭り
５月20日（月）～６月３日（月）　第九展
６月８日（土）、９日（日）　ドイツ館の鉄道会
６月８日（土）～17日（月）　鉄道写真展～鳴門今昔～
６月30日（日）　新ドイツ館20周年記念講演
７月６日（土）　七夕コンサート
７月20日（土）～９月１日（日）　グリム童話展
８月12日（月）～14日（水）　ドイツビール祭り
８月24日（土）　こどもおんがく館
９月15日（日）～30日（月）　田井一男絵画展
９月15日（日）、16日（月）　ドイツフードメッセ
10月５日（土）～11月１日（土）　ドイツ館20年のあゆみ展
10月13日（日）　第20回ドイチェス・フェスト

今年のドイチェス・フェストは鳴門市のこの時期のさまざまな行事と主催者側の都合などもあり、いつもの10月最終日曜日ではなく、10月半ばの開催となりました。これまでとの大きな違いは「大麻（おおあさ）わくわくマーケット」という大麻町商工会青年部主催のイベントと合同で「ダブルフェスタ2013 in なると」と銘打ったイベントのひとつになっていることです。

編集後記

冒頭にも書いたように、現在のドイツ館ができてからちょうど20周年を迎えます。ぼちぼちあちこちに傷みが出てきて、修理の必要な個所がつぎつぎに生まれています。電子機器や電気器具などは耐用年数を過ぎて交換の必要なものがありましたし、これからも出てくるでしょう。一方常設展示の内容も、少しばかり展示替えや解説の修正変更などを加えてきましたが、基本的に20年前から変っていません。これからどうするか、悩ましい問題です。